

大津市歴史博物館 第195回ミニ企画展 「琵琶湖疏水と大津」解説シート・出品リスト

会期：2026年4月21日（火）～5月31日（日）

◆はじめに

令和7年（2025）、「琵琶湖疏水施設」が国宝および重要文化財に指定されました。明治23年（1890）に竣工した琵琶湖疏水（第一疏水）は、大津市の三保ヶ崎から発して、京都へ琵琶湖の水を疏通する人工運河と、関連する都市基盤施設からなります。のちに完成した第二疏水とともに、京都の近代化を支えただけでなく、明治時代の土木技術の粋を集めて築かれた記念碑的な建造物です。大津市内に所在するものでは、第一隧道が国宝に、大津閘門および堰門、大津運河が重要文化財となりました。市内の建造物分野の国宝指定は、昭和36年（1961）以来のことです。

今回のミニ企画展では、琵琶湖疏水記念館（京都市）が収蔵する資料の中から、疏水施設とともに重要文化財の附指定を受けた第一疏水に関連する資料を中心に展示し、大津市内に所在する疏水施設について紹介します。

◆疏水計画の始動

明治2年（1869）3月、事実上の東京遷都により大幅な人口減少が起り、京都は衰退の危機に瀕していました。この状況を憂いた3代目京都府知事の北垣国道（1836～1916）は、産業振興による京都の復興を目指し、そのためには琵琶湖から水を引き様々な目的に活用する疏水事業が必要との考えに至ります。測量調査で湖水面と京都に十分な高低差があることを確認した北垣は、明治16年（1883）11月に京都の有力者や実業家を集めて勸業諮問会を開き、疏水工事の目的や効果について公表しています。この時は「1. 水車による製造機械の運転 2. 運輸（舟運） 3. 田畑の灌漑 4. 精米水車 5. 防火用水 6. 井泉（飲料水） 7. 衛生」の7つの目的が挙げられていました。この計画は数度の修正を経て、政府や京都府民への働きかけも行い、明治18年（1885）1月には起工特許（許可）を取り付けました。

◆疏水工事の進展

明治18年（1885）6月、滋賀県藤尾村で起工式が行われ、ここから明治23年（1890）4月の竣工式まで5年に及ぶ大工事が始まりました。

疏水工事の最大の難関となったのは、当時日本最長のトンネルだった第一隧道の掘削でした。工期短縮のため、トンネル全長の3分の1ほどの場所にシャフト（豎坑）を掘り、そこから掘り進めるシャフト工法が用いられました。シャフト掘削は明治18年8月に始まり、翌19年（1886）4月にはトンネルの深さに達しました。同年には第一隧道の両側からも掘削が開始され、明治22年（1889）3月に貫通を迎えます。

このほか市内の疏水施設について触れると、大津運河は明治19年3月より開削を行い、翌年の2月までに石積みを施工して完成に至りました。大津閘門は大津運河の完成後に工事が始められ、明治22年10月に完成しました。

◆疏水の完成と舟運利用の展開

起工から5年近い歳月を経た明治23年（1890）4月、疏水は完成の時を迎えました。1日には竣工奉告祭を実施し、9日には明治天皇、昭憲皇后を迎えて竣工式が執り行われました。

疏水の完成により、これまで鉄道や旧東海道を用いていた京津間の人や物の輸送に、舟運という新たな手段が登場することになります。当初は遊船や旅客事業の方が人気が、明治28年（1895）には30万人近い人々を運びましたが、鉄道網の発展や利便性の向上に伴い移動手段としての価値は薄れていきます。一方で比較的長期に渡って活況を呈したのが輸送事業で、明治24年（1891）の運輸開始から輸送量は増加を続け大正14年（1925）にピークを迎えます。大津からの便では、玄米や薪、石材や木材、レンガなどが主要な品目で、近代化を進める京都の町には欠かせない物資でした。

◆琵琶湖疏水と滋賀県

京都の近代化を支えた疏水事業ですが、その出発点である滋賀県内の反応は様々で、むしろ工事によって生じる問題を懸念する声も多かったことが当時の公文書類からわかります。

工事開始前に危惧されたのは、疏水により琵琶湖の減水が生じるのではないかとというものでした。京都府は、琵琶湖の水位に関わらず毎秒300個（8.35m³）の流量を確保する方針で、これに対し滋賀県は疏水による減水を補う目的で琵琶湖の水量をコントロールするための堰を瀬田川に設けるよう求めています。このほか工事により水脈が切断され、飲料水の枯渇が生じることも不安視されました。京都府は被害が生じた場合は補償を行うとしたものの、この懸念は的中し疏水完成後も残る問題となりました。このほか家屋の移転や街路の分断など、近隣の人々に様々な形で影響をもたらしました。

※指定区分の表記 ○：重要文化財（附資料） ○：滋賀県指定文化財

| No. | 指 区 分 | 名称 | 時代 | 所蔵者 |
|-----|-------------|--|----------------|----------------|
| 1 | | 疏水桜花図 堂本印象作 | 昭和14年(1939) | 京都市上下水道局・田邊家資料 |
| 2 | ◎ | 琵琶湖水ヲ京都へ疏通スル事業起功ノ義ニ付伺 | 明治時代 | 京都市上下水道局・田邊家資料 |
| 3 | ◎ | 琵琶湖疏水工事費概算 | 明治時代 | 京都市上下水道局・田邊家資料 |
| 4 | ○ | 琵琶湖疏水関係地図 | 原本：明治17年(1884) | 滋賀県立公文書館 |
| 5 | ◎ | 明治十八年六月二日滋賀県下大津ニ於テ疏水起工式祝辞 | 明治時代 | 京都市上下水道局・田邊家資料 |
| 6 | ◎ | 大津三保ヶ崎の築地 田村宗立作 | 明治時代 | 京都市上下水道局 |
| 7 | ◎ | 北国橋 田村宗立作 | 明治時代 | 京都市上下水道局 |
| 8 | ◎ | Bridge over The Kyoto Canal near Oatsu | 明治20年(1887) | 京都市上下水道局・田邊家資料 |
| 9 | ◎ | 大津閘門 田村宗立作 | 明治時代 | 京都市上下水道局 |
| 10 | ◎ | 第一閘門(第二図) | 明治16年(1883) | 京都市上下水道局・田邊家資料 |
| 11 | ◎ | 運河取入口 田村宗立作 | 明治時代 | 京都市上下水道局 |
| 12 | ◎ | 大津閘門・制水門周辺図 | 明治時代 | 京都市上下水道局・田邊家資料 |
| 13 | ◎ | 大津閘門平面・縦断面図 | 明治時代 | 京都市上下水道局・田邊家資料 |
| 14 | ◎ | 大津閘門平面構造図 | 明治時代 | 京都市上下水道局・田邊家資料 |
| 15 | ◎ | シャフト工場 田村宗立作 | 明治時代 | 京都市上下水道局 |
| 16 | ◎ | シャフト工場諸職工服役規則 | 明治19年(1886) | 京都市上下水道局・田邊家資料 |
| 17 | ◎ | 第一隧道東口 田村宗立作 | 明治時代 | 京都市上下水道局 |
| 18 | ◎ | 第壹隧道東口木枠図 | 明治時代 | 京都市上下水道局 |
| 19 | ◎ | 隧道掘鑿 田村宗立作 | 明治時代 | 京都市上下水道局 |
| 20 | ◎ | 第一隧道大津口工事日報 | 明治21年(1888) | 京都市上下水道局・田邊家資料 |
| 21 | ◎ | カンテラ | 明治時代 | 京都市上下水道局・田邊家資料 |
| 22 | ◎ | 長等山隧道 田村宗立作 | 明治時代 | 京都市上下水道局 |
| 23 | ◎ | 電気導火線 | 明治時代 | 京都市上下水道局・田邊家資料 |
| 24 | ◎ | 長等山隧道西口 田村宗立作 | 明治時代 | 京都市上下水道局 |
| 25 | ◎ | 山科運河 田村宗立作 | 明治時代 | 京都市上下水道局 |
| 26 | | 疏水船模型 | 現代 | 本館 |
| 27 | ◎ | 山科運河 田村宗立作 | 明治時代 | 京都市上下水道局 |
| 28 | | 近江曳船商会引札 | 明治時代 | 本館 |
| 29 | | 京都大津間疏水線路之図(并ニ京都大津近キ辺リ名所) | 明治25年(1892) | 本館 |
| 30 | ○ | 琵琶湖疏水ノ儀ニ付上申 | 明治17年(1884) | 滋賀県立公文書館 |
| 31 | ○ | 疏水事業に関する照会 | 明治18年(1885) | 滋賀県立公文書館 |
| 32 | ○ | 滋賀県大津今堀町外十八ヶ村飲料水補給方法 | 明治21年(1888) | 滋賀県立公文書館 |
| 33 | ○ | 疏水路閉鎖ノ事実取調ノ件 | 明治29年(1896) | 滋賀県立公文書館 |
| 34 | ○ | 琵琶湖疏水誌(稿) | 明治25年(1892) | 滋賀県立公文書館 |

※附指定とは、指定物件とともに一体的な価値を有する資料や建造物をいいます。疏水施設の場合は当時の関係文書や絵画、工事に用いたカンテラ、導火線などが附指定を受けました。